

テレビニュースにおける発話形式の変化とその社会的要因に関する一考察

北陸大学 轟 里香

1 目的

本報告は、テレビのニュースで見られる発話の形式の変化を考察することを目的とする。近年、従来見られなかったような現象がテレビニュースで見られる。轟 (2014) は、言語表現に見られる現象〈体言止めなど〉とその社会的要因を明らかにした。本報告では、発話の形式の変化に焦点を当てる。従来、ニュースにおいては、アナウンサーが一人で発話するという形式が大部分であったが、現在、二人以上の会話の形式が非常に顕著になっている。本報告の目的は、この現象がいつどのように始まり拡大していったのかを通して、この現象を引き起こした社会的要因が何かを示し、加えて言語表現自体に生じている現象との関連を明らかにすることである。

2 方法

本報告は、代表的なニュース番組として、NHK の「ニュース 7」をデータとして用いた。過去に放送された「ニュース 7」において、二人以上の会話の形式が始まった時期と、どのような項目において早く出現したかを見ることにより、この形式の拡大の過程を調べた。それとともに、轟 (2014) が指摘する言語表現自体に生じる現象との関連を分析した。

なお、本報告は、2011 年度 NHK アーカイブス・トライアル研究に言語学的な観点から応募し、採択された研究提案に基づき収集したデータによる研究を発展させたものである。1995 年度以降のデータの分析によって、NHK の代表的なニュース番組における発話形式の変化の過程を調べた。

3 得られた知見

「ニュース 7」においては、二人による会話形式が、気象情報のコーナーにおいて最初に出現していたことが分かった。また、当時 (2007 年度)、気象情報のコーナーを担当していたのは、雑誌等でいわゆる「タレント」のような扱いをされることで有名であった気象予報士であった。その後、通常のニュース項目において、2015 年度にアナウンサーが二人並んで交互に発話する形式がとられ、その後通常のニュース項目においても 2017 年度から会話の形式がとられるようになった。

このように、ニュースにおける発話の形式は、一人の話者が視聴者に向かって語りかけるという形式から、複数の人物が語り合い、視聴者がそれを眺めるという形式へと変化した。一人のアナウンサーが視聴者に向けて語りかけるという形式は、従来のニュースに特有の形式である。これに対し、二人以上による会話の形式は、バラエティ番組やドラマなど娯楽的な番組でとられるものである。このような形式がニュースでとられることは、ニュース全体が娯楽的に脚色されるという傾向と関連したものとして捉えることができる。「ニュース 7」において「タレント」のような気象予報士が担当する気象情報において会話形式が最初に出現していることは、ニュースにおける会話形式とニュースの娯楽化との関連を示すものと言える。

一方、轟 (2014) が指摘するように、ニュースで使用される言語変化の多くは、ニュース番組の娯楽化という共通の社会的要因によって引き起こされている。本研究により、言語現象と発話の形式の両方に、同じ要因、すなわちニュース番組の娯楽化という社会的要因が働いていることが明らかとなった。本報告が示すように、言語に関わる現象を統一的に説明するためには社会的要因を考慮に入れることが不可欠であり、言語研究において社会学的な知見はきわめて重要である。

文献 轟 里香 (2014) 「テレビニュースにおける言語現象とその要因に関する一考察」 *Osaka Literary Review*, 第 53 号, 33-54.

村松賢一 (2005) 「ニュース番組における『おしゃべり』」三宅和子、岡本能里子、佐藤彰編『メディアとことば 2』ひつじ書房。